

初めに

私は高校の共学化における課題について論じたいと考える。

私は宇都宮中央女子高校の卒業生で、在学中、高校3年生のときに共学化し、1年生が男子、女子ともに入学した。当時在籍していた生徒は宇都宮中央女子高校が共学化することを認識して入学しており、共学化することそのものへの不満はあまり聞かれなかったが、実際に共学化に向けて校舎や施設の整備、その他学生生活にかかわる制度面の整備が始まると、予想外の障害が現れた。その際、実際に在籍していた立場として生徒側不満や設備変更による不便を味わったため論文として運営側の障害ではなく生徒側の障害を考察したいと考えた。

この論文を書く意義として、昨今推し進められる男子高校、女子高校の共学化における在校生のケアにつながると考える。共学化する前から学校に所属する学生にとって共学化は大きな変化であり、学生生活への影響は大きい。実際の体験やほかの学校の事例などを取り上げることで、想定していなかった問題が浮き彫りになり、今後の共学化において生徒の負担軽減につながると考える。共学化の背景とともに、共学化の際に起きた障害を部活面、伝統面、設備面の主に3つに分けて考察し、その解決策を提案する。

実際の様子

当時在籍中に聞こえた生徒の意見として、大きく分けて2種類の意見があった。まず1つ目に、意識的な問題に関する意見である。宇都宮中央女子高校の生徒の多くは小学校や中学校を共学の学校で過ごしており、また、授業などは女子高の体制のまま行われるため男子が入学してくることへの不安などは聞こえなかった。しかし、現状女子しかいない部活に男子が入ってきたら男子側の肩身が狭いのではないかという意見や、共学の生徒と女子高の生徒では雰囲気異なるため部活内の不和を生まないか心配であるという意見が聞かれた。女子高で女子しかいない場で生活すると、個人としての異性との接触機会が減り、男性という一つの属性とし男性について語ってしまう恐れがある。その弊害として男子生徒に対する気配りを忘れてしまい、着替えの際に異性がいることを失念してしまう、男性という異性に個性差があることを忘れ「男って～」などという気遣いの無い話をしてしまうなどが考えられる。また、宇都宮中央女子高校には家庭科があり、普通科の共学化に合わせて同様に共学化されるが、男子の割合が少なくなることも予想されることから家庭科クラス内の雰囲気がどのようになるのか心配する声も聞かれた。

2つ目に、伝統の面を不安視する声も聞かれた。校歌の変更や制服の変更など、宇都宮中央女子高校が共学化するのではなく、宇都宮中央女子高校が廃校になり、宇都宮中央高

校という全く新しい高校が宇都宮中央女子高校跡地に作られるのだという印象を受けた。校歌については宇都宮中央女子高校の校歌の歌詞にあった「家庭を開く」というものがなくなるなどまったくもって別の曲となった。入学式では新たな校歌を覚えられず、在校生、新入生共に伴奏を聞きながら授業外で覚えた合唱部の歌声が体育館に響き渡るというある種異色な光景となっていた。また制服に関しては宇都宮中央女子高校で冬季の防寒のためのみ許可されていたスラックスが女子生徒であっても常時着用可能となるなどのジェンダーに対する配慮が見られる形となった。

3つ目は設備に関する不満である。宇都宮中央女子高校では野球部が使用するグラウンドをつくるために校庭を工事したり、桜の木を切ったりするなどの行為が行われたが、校庭の使用で制限を受けたり、シンボルであった水上太白桜を伐採されたりしたことに対する不満が散見された。また、それ以外にも男子トイレをつくるにあたって一時的に一部フロアのトイレが使えなくなるなどの日常的な不便もあったため、それらの不便さに対する不満が共学化に対する不満へと変換された点があると推測する。

これらに加えて、宇都宮中央女子では共学化になることを承知して入学してきた生徒しかいなかったため共学化そのものへの不満は聞かれなかったが、宇都宮中央女子高校出身の中学校の担任は伝統がなくなることを嘆いていたため通っている生徒や教師以外からの障害もあると考えられる。

背景

近年日本では女子高、男子校の共学化が進んでいる。文部科学省の学校基本調査によると、男女別学の高校は1975年には1180校(男子高435校、女子高745校)だったが、23年度は368校(男子高99校、女子高269校)と3分の1に減少している。少子化による学校の統廃合や共学化が要因とみられる。¹

特に北関東では戦後GHQの指導者が男女別高校に寛容な姿勢を見せたことから男女別高校が多いが、現在の動きとしては、栃木県教育委員会が第二期県立高等学校再編計画を発表し、「共学化については、共学校と別学校の共存を望む県民世論にも配慮しながら、各高校や地域の実情等に応じて行います。」としながらも同時に、「男女別募集定員に片寄りのある地区については、共学化を行います。」と発表し実際に宇都宮中央女子高校が共学化するといった共学化に対する方針を示したり、埼玉県も2024年に「主体的に共学化を推進していく」という方針を明らかにしたりしている。また、公立高校は上記のように県の主導で

¹ 読売新聞 高校の共学化加速、男女別学はピーク時の3分の1に…埼玉県では卒業生ら反対で存続議論 (2024/06/29)

<https://www.yomiuri.co.jp/kyoiku/kyoiku/news/20240629-OYT1T50127/>

(最終閲覧日 2025/7/7)

共学化の方針を定めているが、栃木県の海星学院が共学化して星の杜学園になったように私立高校でも共学化の流れがある。

しかし実際は共学化に反対する動きもあり、埼玉県では高校の共学化に対して反対する傾向が強い。

埼玉県では県内に在住又は在学の中学生及び高校生とその保護者を対象として埼玉県立の男女別学校12校の「男女共学化」、「男女別学の維持」等の意見を把握することを目的としたアンケートを実施した。²中学生の19.3%、高校生の57.2%は県立の男女別学校は、共学化しない方がよいと回答し、その理由として「男女共学校・男女別学校の両方を選べる方がよいから」「共学化すると、伝統の尊重や学校のふんいきのいじができなくなるから」「学校生活を安心して過ごせるような友人ができる、または、居場所があるから」といったものが挙げられた。高校生は共学化しない方がよいと回答した割合が多く、実際に高校で生活した高校生の方が現状維持を望む傾向にあると分かる。

保護者の回答としては43.5%の中学生の保護者と、57.3%の高校生の保護者が共学化しない方がよいと回答した。理由としては中学生の保護者は生徒と同様に「男女共学校・男女別学校の両方を選べる方がよいから」「共学化すると、伝統の尊重や学校のふんいきのいじができなくなるから」「学校生活を安心して過ごせるような友人ができる、または、居場所があるから」というものが上位3位の理由だったが、高校生の保護者の理由としては「学校生活を安心して過ごせるような友人ができる、または、居場所があるから」という理由を「自分の力を発揮できる、または、伸ばすことができるから」という理由がわずかに上回った。

このアンケートの結果から、実際に高校生活を経験してからのほうが共学化への抵抗感は高まると考えることができる。

主導する立場から見る男女共学化の課題

前述のように、公立であれば県の教育委員会などの学校運営側が、私立であれば学校自体が学校の共学化を推進する立場となる。その際、運営側が直面する課題として以下のものが挙げられる。1つ目に受験生の受験倍率の増加が挙げられる。³例として、地域の国公立校の割合を男女平等にするために共学化された宇都宮中央女子高校では共学化する前年の2021年度の入試倍率が1.18倍だったのに対して共学化した年の2022年は1.86倍だった。

² 埼玉県教育委員会 埼玉県立の男女別学校に関するアンケート結果（掲載日2024年8月22日）（最終閲覧日2025/7/7）

<https://www.pref.saitama.lg.jp/documents/255731/saitamakennirtunodannjyobetugakkounikannsuruanke-tokekka.pdf>

³ 家庭教師のトライ 栃木県 県内人気校のご紹介① 宇都宮中央高等学校（掲載日2022年9月16日）（最終閲覧日2025/6/6）

このように倍率が大きく変化することによって受験生の想定よりも合格の難易度が上がるため、例年通りの偏差値に達していても希望する高校に入学できないことが考えられる。

2つ目に、住民からの反対が挙げられる。⁴埼玉県では県立男女別学高校の共学化議論を巡って、県立高校生の有志らが共学化に反対する3万4461人分の署名と、生徒との対話などを求める要望書を県教育委員会に提出した。具体的な意見としては「女子がいると自分を包み隠してしまうことがあるが、男子校ではそのようなことがなく、自分の自信にもつながる」や「中学校で少し嫌なことがあったが女子高に来て救われた」などが聞かれた。この例と前述の埼玉県のアンケートを参照すると高校を卒業した、あるいは在学中であるほど反対される可能性が高まると分かる。すなわちある程度実感のこもったあるいは根拠に基づく反対である。したがって共学化を主導する立場としても無視できない主張であり、こういった反対意見があることも運営側における共学化の障害の一つである。

3つ目の問題として共学化したとしても新たに募集する側の性別が集まるわけではないというリスクも挙げられる。自身の性別がマイノリティ側になる学校に入学することは一定の勇気が必要であり、それが理由で共学化しても新たに募集した側の性別が集まらない場合がある。加えてもともと別学であった学校は、別学であるという理由で生徒を集めていた側面もあると考えられるため、共学化したことでそういった層の需要がなくなりかえって志望者数が減少することも考えられる。

4つ目の問題として別学の学校に在籍する生徒たち自身からの反対が挙げられる。この問題に関しては、急激な共学化を行う場合、別学であることを前提に進学した生徒のケアが不足してしまうということに起因する。令和9年度から大学を共学化する方針を公表した武庫川女子大は、「女子大学であることを前提に進学を決めた学生たちの思いや安心できる学びの場を尊重し、より公正で誠実なプロセスを求めます」という主張から共学化の反対署名が行われ、それに賛同する人は3万6千人を超えた。⁵

部活面の障害

共学化における部活動の問題は、大きく分けて2種類であると考えられる。

まず1つ目は共学化の流れに沿って行われる部活動の増設である。宇都宮中央高校で野球部が新設されたように、新たに入学する性別に合わせて部が新設される動きがある。2025年度に共学化した東福岡学園でも新たにダンス部が創設された。この動きによっても

⁴ 埼玉新聞 県立高校の共学化に反対 高校生有志らが県教委に3万4461人分の署名提出 「男女差別ではない」「女子校に来て救われた」「女子がいると自分を包み隠してしまう」 要望あれば生徒から意見聴取も (2024/07/24)

<https://www.saitama-np.co.jp/articles/91814/postDetail> (最終閲覧日 2025/6/6)

⁵ 産経新聞「裏切られた」「男性恐怖症の人も」武庫川女子大への反発 共学化中止求め反対署名3万超 (2025/6/19)

ともと在籍していた生徒側に特定の性別のみ可能な部をつくることは不公平ではないかという不満が生まれることが考えられる。

一方で男女混合で行う部活も多いことから、2つ目の問題として既存の部に新入生が入部する際に男女比が偏ることが挙げられる。特に文化部ではその傾向が顕著であり、共学化によって入学できるようになった方の性別の生徒が男女比を気にして希望する部活に入部できない可能性があるという懸念がある。さらにこの問題に関して、単純に新たに入学する性別の人数が少なく、同性のみの部活にしたとしても人数の少なさゆえに満足な活動が行えないという問題も考えられる。例えば団体競技の野球では9人いないと試合をすることができないが、新設の部だと9人揃う可能性が低下する。また合唱部などのようにすでに同性で構成されている場合に別の性別を組み込みづらい部活も存在する。仮に女子のみで構成されていた場合は、ソプラノパート、メゾソプラノパート、アルトパートで構成されていることが多く、声変りをした男子が参加することは難しい。

伝統面の課題

共学化することによってももとの校風が失われるという伝統の面での障害も考えられる。そもそも別学であった学校を共学化すること自体、確実に校風や伝統に変化をもたらすものであり、具体的に制服や校歌などに変更がなくとも伝統という面においては生徒のアイデンティティの意識には影響を及ぼす。具体的には前述のように宇都宮中央女子高校では宇都宮中央高校に代わるにあたって新たな校歌が作られ、「家庭を開く」などの女子高を彷彿とさせる、従来の女性像を想起させる歌詞が削除されジェンダーの垣根が気にならない歌へと変更された。このこと自体は共学化にあたって新たに入学する男子生徒へ向けた当然の対処であるが、校風が失われたという点に関しては否定できない。校歌は入学以来歌い続けることでその学校の校風や特徴がどのようなものであるのかを歌詞を通じて感じ取らせる役割があるとともに、生徒がその学校の生徒としてどのように在るかという意識も多少は校歌によって誘導される面があると考えられる。したがって校歌の歌詞が変化することで学校の生徒としてのアイデンティティの揺らぎにつながるということが予想される。また他の事例としては学校名の変更も挙げられる。宇都宮中央高校は共学化した際も宇都宮中央高校として大きな校名の変更はなかったが、順心女子学園という校名から共学化の過程で広尾学園と名前を変えた例などもある。学校名の変更によって生徒が学校への愛着を薄めさせたり、生徒が学校に対して共学化で大きく変わった、在学生をないがしろにしていると感じたりする要因となり得ると考えた。

設備面の課題

共学と別学では設備面でも変える必要がある。前述のようにトイレや更衣室を増やすだけでなく、部活の増設を見越して体育館を増設したり、グラウンドを拡張したりする必要もある。これらの整備のための工事で一時的に在校生が不便になったり、工事が長引くと体育

などのカリキュラムが変わる可能性もあつたりするため、前述の2つよりも在校生の実害が大きいと考えられ、その不満が共学化への不満へ向く可能性があると考え。このように在校生徒へのデメリットがあるほか、上記のように設備面の整備を行っても共学化初年度は設備が十分でない、あるいは共学化2年目に新たに入学する性別の生徒が増加すると既存の設備では追い付かないといったことも懸念される。

改善のための提案

本項目では上記のような共学化にあたる課題によって生徒に興じる不満を解消し共学化をより円滑に進めるための提案を行う。

まず1つ目に部活面の課題を解消するための案として片方の部活に存在する部活とするのではなく、男女で分けて2つの部活を用意することを提案する。前述のように人数不足で大会に出場できないなどの満足な活動を行えない可能性があるが、同好会のような形となっても多少は生徒の要望を叶えられると考える。また、兼部を禁止している学校もあるが兼部を解禁していくつか部活を掛け持ちできるようにすれば部活によって大会に参加できるため内申の面での差や大会への出場の有無による経験差も解消できると考える。

2つ目に伝統面の課題を解消するための案として元の校歌の歌詞からリンクする部分を取り入れることで在校生の愛着を継続させたまま共学化に移ることができると思う。例えば学校周辺の自然や目指す人間像を歌詞に盛り込んでいる学校が多いと考えるがそういった共学や別学によって変わらない学校の特色を継承することで別学の学年と共学の学年の間の一体感を生み出すことができるのではないだろうか。

3つ目に設備面での課題を解決するための案として工事の計画を綿密に練ることを提案する。基本的にトイレなど日常的に使用し代替不可能なものは長期休みなどの工事を計画するが仮にその期間が足りず生徒の登校期間にまで工事がずれ込む場合があり、学校側はそのことを見越して比較的使われないトイレの工事を後にするなどの工夫が必要である。また、工事によるカリキュラムの変更についても学年の初めに説明をすることで生徒の納得を引き出すことができると考える。

考察

最後に共学化に関する考察を述べる。別学から共学化するにあたって、宇都宮中央女子高校のように事前に知っていたにせよ、武庫川女子大学のように突然知らされたにせよ、入学してから年単位で過ごしてきた学校の環境が変化するというのは直前になって抵抗感が芽生えても仕方のないことだと考える。またそういった心理的な負担だけでなく環境の面でも今回の論文で述べたように生徒の生活に直結する変化が起こるため、そういったことも共学化への忌避感の要因である。しかし共学化するという事は単に定員割れの措置として廃校を救うだけでなく、生徒の知見を広めたり LGBTQ の生徒が自身の個性と折り合いをつける場となつたりするというメリットがある。共学化によって生徒が学生時代に

かかわる人の幅が増えて新たな考えを得られたり、思春期特有の異性への忌避感や興味などの意識を乗り越えるという経験が身につけられたりする。したがってその進行に関しては共学化というものに悪いイメージを抱かれないように慎重に進める必要があり、今回の論文のような生徒側が感じるデメリットや課題を最小限に抑えながら生徒の理解を求める必要がある。